

## 哲学的思惟について

内山 節  
UCHIYAMA Takashi

戦後の日本でロングセラーとなった本の一位はファラデーの『ロウソクの科学』、二位はマルクスとエンゲルスの『共産党宣言』である。私が十代を過ごした 1960 年代は、これらの本に象徴されている雰囲気が、まだ色濃く残っていた。一方には科学が未来を開くという雰囲気があり、他方には社会主義への関心があった。当時の学生にとっては、『共産党宣言』は読んでいなければ友人との議論に加われないというような感じで、ほとんどの人たちが一応購入していたものである。もちろんきちっと読んだ人がどの程度いたのかはよくわからないが、読んだふりぐらいは必要だった。

そういう時代だから、私もマルクスを手始めに哲学系の本を読むようになっていく。『経済学・哲学草稿』、『ドイツ・イデオロギー』といった本が私が読んでいた中心にあって、ところがこれらの本を理解しようとするとうとうヘーゲル哲学の知識が必要になる。マルクスはヘーゲル哲学の土壌から育った人だから、論理の前提にヘーゲル哲学がおかれているのである。そういう理由でヘーゲルを読むようになり、ところが今度はヘーゲルを読み込もうとするとカント哲学の知識が必要になる。そんな感じで本を読んでいると、哲学は面白いと感じるようになってきた。いまでも私にとってはカント哲学の影響が一番大きいのかもしれない。

マルクスのとらえ方にはさまざまな「流派」がある。「流派」によって重視する文献も違う。私が重視していたのは初期のマルクスの文献で、疎外論を軸にしていた頃の本である。この読み方は、主体性論を柱においてマルクスを解釈していた当時の主体性派の哲学に近いもので、たとえばその代表者には梅本克己がいたが、彼の『過渡期の意識』、『人間論』、『マルクス主義における思想と科学』などは私の愛読書でもあった。梅本は、歴史をつくっていく人間の問題を解き明かすことを軸にしてマルクスの思想を読み解こうとした人で、人間の主体性はどこにあるのかを探りつづけた人である。

私はマルクスからも梅本たちからもいろいろなことを学んでいて、それらはいまでも私の考え方のなかに残っているが、数多くの文献を読んでいくうちに少しずつ違和感を感じるようになっていたことも確かだった。マルクスは社会主義社会の必要性やそのための革命を主張した思想家である。ところが最終的に彼の思想が集約されていく『資本論』を読んでも、なぜ人間は革命を起こす可能性をもっているのかわからない。資本主義に矛盾があるということまでは、彼の理論はきわめて精密なのだけれど、しかし矛盾があるからといって革命が起きるとはかぎらない。現に今日の世界はさまざまな矛盾をかかえているが、革命を起こそうという人々は決して多くはない。

社会に矛盾があるということと人間が行動を起こすということは、単純につながってはいないのである。とすると何をエネルギーにして人間は行動を起こすのか。そのことがマルクスの思想では明らかになっていない。革命を主張しても、社会の矛盾という革命の客観的根拠は明らかにされても、革命の主体的根拠は解かれていないのである。この点についていえば、当時マルクスと対立していた非マルクス系のさまざまな社会主義者たちの方が、この問題に言及していた。19世紀のヨーロッパには、さまざまな社会主義の潮流が存在していたのである。

問題は人間はなぜ社会を変えようとする行動を起こすのか、である。この課題を解くには、人間の存在とは何かが解き明かされなければならない。人間の存在のなかに、なぜ行動への衝動が生じるのかである。

この問いに一定の回答を与えていたのは、前記した梅本たちの主体性派の哲学と、当時よく読まれていたサルトルに代表された実存主義の哲学だった。ところがそれらも十分なものには思えなかった。どちらの哲学も主体性のありかを個人においているのである。梅本にあっては歴史を変革しようとする個人の主体が対象になり、サルトルでは自己の存在を乗り越えようとする実存的人間の形成が課題になる。どちらも主体は個人のもののなのである。

この個人の主体を問うた近代の哲学には、キェルケゴールやマックス・シュティルナーがいる。キェルケゴールは真に主体的な個人として生きようとした人だし、シュティルナーも同様だった。私はこういう純粋に自分の思想で生きた人たちは好きなのだが、キェルケゴールがめざしていたのは真のキリスト者になることだった。たった一人で神の前に立つ主体こそが彼にとっての主体的人間だった。それに対してシュティルナーはキリスト教を批判した人間である。政治や宗教の世界が人間たちを主体的人間として生きられなくさせていく、ゆえに主体的人間になるためには人間たちを取り込んでいく一切のものと闘わなければならないと彼は考えていた。後にヨーロッパでは、シュティルナーはアナキズムの創始者ともみなされるようになる。

キェルケゴールとシュティルナーは両極端を生きた人ではあったが、共通しているのは、キリスト教社会がつくり出した人間のあり方である。根底にあるのは神と個人の関係だ。キェルケゴールはそれを純粋なカタチで実現しようとし、シュティルナーは純粋な個人であろうとして、キリスト教を否定した。つまりキリスト教が提示している個人をあくまでキリスト教に依拠してとらえるのか、それを否定することによって再認識するのかの違いが、この両極端の哲学をつくりだしたのである。

近代的個人という概念は、中世のキリスト教社会が生み出した個人概念から、神を喪失させるかたちで成立している。それは徹底的にヨーロッパローカル思想である。とするとそれに依拠して人間の主体を論じること自体のなかに、哲学の罣が潜んでいると考えることはできないか。

そういう思いが、人間の存在とは何かを新しい視点で解きなおすという課題を私に与えた。そしてこの視点からの最初の作業が、『労働過程論ノート』の執筆であった。この本の課題は資本主義での労働は人間をどのように形成させていくのかであり、こ

の過程のなかには、資本主義が人間を支配できそうででききらない矛盾を内包していることを見いだそうとしていた。人間の存在自体を矛盾した存在としてつかむことによって、体制への迎合も、逆にそれへの批判も起こしうる人間の存在のかたちをとらえようとしたのである。それは革命への主体的根拠を示すことができなかったマルクスへの批判でもあった。

『労働過程論ノート』は私が26歳になった頃に出版された本であるが、正直に言うと、別に書きたくもなかったのである。哲学にはさまざまな表現形式がある。もちろん文章で表現しても構わないが、それだけがすべてではない。絵や音楽や演劇などで表現することも可能だし、文章にする場合でも小説やエッセーで書いてもいい。実際哲学者たちは多くのエッセーを残していることが多いのだけれど、さらに自分の生きた歴史や仕事の仕方などで表現することも哲学は可能なのである。文章を書くことは、さまざまな表現形式のほんの一領域にすぎない。私は別に作家になりたいという気持ちがあったわけでもないから、さほど書く気もなかった。

しかしそういう問題意識にたった研究を誰もやっていないのである。だから、仕方ない、自分でやるか、という気持ちになった。それをまとめておくことも自分の役割かもしれないと思ったのである。

私は結構多くの本を書いてきたし、講演なども年に100回以上する年もある。さまざまなグループと関わりをもっていて、そういう活動もそれなりにこなしている。だから意欲的に生きていると思われることがよくある。しかし実際はそうではない。私は目標とか目的、意欲といった言葉は下品な言葉だと思っているし、そんなつまらないことに時間を費やす気などない。だから次はどんな本を書きたいのですか、などと聞かれると面食らってしまう。書きたい本などないのである。私はそれが自分の役割だと感じたときだけその仕事をする。それ以外は一切関心はない。『労働過程論ノート』もそれが自分の役割だと感じたから書いただけである。

さてもう一度存在の問題に戻ることにしよう。たとえば私の好きな小説家の一人にアンドレ・ジードがいる。彼は1920年代にアフリカを旅行し、『続コンゴ紀行 チャド湖より還る』を発表している。アフリカの文化のすばらしさを認め、ヨーロッパにアフリカから手を引くことを求めた作品でもある。ジードの主体がこれを書かせたのである。だがこの主体はジードが一人で創りあげたものではない。アフリカの人たちがいなければ形成しえないし、さらには、たとえ残念なことであったとしても、植民地支配という現実がなければ生まれない主体であった。つまりジードは旅をとおしてアフリカと関係をもち、植民地支配と関係をもった。この関係がジードの主体を成立させた。とするとこの主体はジードのものでありながら、ジードをつくりだしたさまざまな関係が生み出したものだということになる。

関係がその人の存在をつくりだすのである。だから自分の存在も主体も、自分のものではない。フッサールの「間主観性」という言葉をもじって「間関係性」という言葉を使えば、主体も存在も「間関係性」のなかにあるといってもよいだろう。関係のなかにあるということである。にもかかわらず人間はそれを自分の主体、自分の存在というふうに錯覚する。そこに精神の現象学がある。自分は私という「ここ」にはい

ないのだ。さまざまな他者との間に存在し、その存在が主体をつくりだす。とすると主体的であろうとすることは、新しい関係を築くことだ。他の人々との関係においても、自然との関係においても、歴史や文化、地域などとの関係においても、ジードのように植民地支配との関係においてもよい。新しい関係の創造が新しい存在をつくり、その存在が主体を成立させる。

だから私にとっては、関係のなかでの私の役割をこなすことにしか関心がないのである。

2010年から5年間、私は21世紀社会デザイン研究科の教授を務めることになった。私の前任者の北山晴一先生から問答無用のような誘いを受け、そうせざるをえない状況に陥ってしまったのだけれど、学生さんたちとの関係で役割をこなしていくのも悪いものではなかった。もっとも本当に役割をこなせたのかどうかはよくわからない。案外学生さんたちや先生の方が、私の居場所をつくるための役割をこなしてくださっていたのかもしれない。